

熊本県球磨方言の“ goto ” の用法

その他のタイトル	Usage of “ goto ” in Kuma Dialect in Kumamoto Prefecture
著者	小野 綾子
雑誌名	東京大学言語学論集 = Tokyo University linguistic papers (TULIP)
巻	41
号	TULIP
ページ	215-232
発行年	2019-09-30
URL	http://doi.org/10.15083/00078588

熊本県球磨方言の“goto”の用法

小野綾子

new2017a@gmail.com

キーワード: 球磨方言、ごと、用法

要旨

本稿では熊本県球磨方言にみられる「ごと」の用法を述べる。「ごと」は名詞、形容詞、動詞に続いてあらわれる。名詞+助詞の形ででてくる「ごと」があり、そのさいの助詞は =no、=N、=ga の3種類である。形容詞に続く「ごと」は説明や推量の意味をもつ。「ごと」の前にてでてくる動詞は否定形や意思形である。

1. はじめに

本稿では熊本県人吉・球磨地方（人吉市、錦町、あさぎり町、多良木町、湯前町、球磨村、山江村、相良村、水上村）で話される球磨方言の談話中に出てくる「ごと」について実際の発話例を紹介しながら分析する。以下、「ごと」の表記について、本文では説明や用例に合わせて“goto”と表記することもある。小野（2018）でも言及したが本稿に至るまでには過程がある。最初は日本語研究における「ヨウダ、ソウダ、ラシイ」を球磨方言の中から探して分類するつもりであった。しかし、1人の1回の発話を1行として文字化した12,254行の会話のなかで、以下の1例しかあらわれなかった。

(1) kb.3<u n="250" sp="L2">

sosu=to ano goboo-basi=no-joo-na gotaQ-to=no

ni-seN-baQka-zjaQ-tur-oo=na ano kurok-a=to</u>

「そうすると、あのゴボウ箸のような gota ものは
二銭くらいだったろうね。あの、黒いの。」

（ここでは、姉妹が子供時代に食べていたおやつの話をしている。L1, L2 姉妹が子供のとき（1925年前後であろう）のおやつの話で盛り上がっている。この直前の会話では、「一銭で飴が5つ買えたよね。」と話している。この発話はその直後である。その後、「kjara（蒨）がいっぱいあったからよく食べてたよね。」という話になる。）

共通語の「ヨウダ、ソウダ、ラシイ」に関して様々な分類がある。そこで、これらと同様の働きをする球磨方言語彙は何だろうかと探したところ“gota”と“goto”であった。

柳田 (1985:173) が室町時代のことばに言及しつつ、「九州方言における「ゴタル」は「ゴト」に「アル」をつけたものである」と述べているため、参考にした。gotā と goto の大きな違いは、goto は名詞に直接続くことがなく名詞+助詞のあとに goto とあられる。漆谷 (2010:223) は「名詞に下接するソウダは、「のようだ」という表現に分化し、近代では衰退してしまう。」と述べている。球磨方言の gotā と goto も関係あるかもしれない。gotā の前の助詞の種類は =N, =no または助詞がつかず名詞に直接続く (小野 (2018)) 一方で、goto の前の助詞は =N, =no は同じであるが、=ga がでてくるといふ違いがある。

本稿で扱う goto について共通語に訳すと「ヨウダ、ソウダ、ラシイ」が当てはまる例が多い。しかし、当てはめにくい例もみられたため、村上 (1998:90) の分類を参考にした。現代日本語を積極的に用いなかった理由として上記一例ではあるが、goboo-basi=no-joo-na gotāQ-to=no という例があるため、gotā, goto を安易に訳してはいけないのではと考えている。そこで、まず本稿では goto がどのような用法をもつかについて分類するにとどめている。

方言研究において、発話例を用いた gotā, goto について扱った詳しい分析は現在のところ見つかっていない。球磨方言を現代共通語に訳して現代語の研究を参照するとより詳しくわかると思われるため、今後の課題としたい。本稿では goto がそのまま用いられている古典語を参照した方が分類しやすかったため、ここでは村上 (1998) を参照した。村上 (1998) は「ごとし」について「たとえ、例示、同内容」であると述べている。本稿では、球磨方言の発話中にみられる goto が村上 (1998) と一致するかについて、実際の発話例を抜き出し goto を検証する。なお、動詞に関しては否定を表すと思われる接辞 -N を伴う例が多い。他の接辞として、発話者の確信や強い意思を表す -baN、他者の行動を表す -jar が見られた。

2. 先行研究

現代の日本語研究において、「ごと」そのものに関する詳しい研究はほとんどない。そのため、一般の古典語の研究を参照した。また、「ごと」を含む語彙については以下の辞書を参考にした。「ごと」の意味内容に関しては『日本語文法辞典』(日本語文法学会編) (2014: 627-635)の中から、尾上 (2001)、仁田・益岡・森山 (2000, 2001) を参照している。

辞書における「ごと」に関する記述について、上田 (編) (1968:783) は『大日本國語辞典』において、「(接尾) ごとく。ように」と述べている。「ごとし」に関して「一、物事を比べて、其のとほりなるをいふ詞。やう。とほり。(略) 二、物事の一例を擧げていふに用ふる詞」(上田 (編) (1968: 785)) と述べる。接尾語として分類しているのは時枝 (1961) も同じである。金田一 (編) (1979: 893) による『学習国語大辞典』では、「ごと」を「助動詞「ごとし」の語幹」として扱い、「似ているものに比べ、たとえる意を表す。」と述べている。また「ごとし」に関して金田一 (編) (1979: 896) は「活用語の連体形や体言、また、それらに助詞「が」「の」の付いたものに接続する。①似ているものに比べたとえる意を表す。(略) ②同類中の一例として提示する意を表す。(略) ③はっきりと断定しないで、婉曲・不確実というのに用いられる。」と言う。加えて「(1)語源は「同じ」の意を表す「こと」を形容詞的に活用させたもの。(略) (3)

上代・中古には、語幹「ごと」が連用形「ごとく」と同じように用いられることがある。」と述べる。松村（編）（1989:698）は『大辞林』の中で、「ごと」について「{文語動詞「ごとし」の語幹}」と述べている。「ごとし」に関して松村（編）（1989:699）は「《助動》文語。{体言+「の」、体言+「が」、あるいは活用語の連体形（+「が」）につく} もともと文語の助動詞であるが、（略）」と述べ、文語扱いをしている。

村上（1998:90）は一般の古典語の「ごとし」について、『源氏物語』、『方丈記』、『土佐日記』の中から用例を挙げ、それぞれ「たとえ、例示、同内容」と次のように分類している。なお、以下は村上（1998:90）の表の順番を筆者が変更したものである。

たとえ

○ノヨウダ ○ニ似テイル

・このあらむ命は、葉のうすきがごとし。（源氏物語）

[<コノ生キテイル命ハ、葉ノウスイヨウニウスイモノデアル。]

例示

○タトエバ……ノヨウナ

・和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。（方丈記）

[<皮カゴノ中ニハ>和歌ヤ音楽ノ書、往生要集ノヨウナ本ノ抜き書キシタルモノヲ入レテイル。]

同内容

○ト同様デアル ○ノトオリデアル

・六日、昨日のごとし。（土佐日記）

[六日、<コノ日ハ>キノウト同様デアル。]

一方、「ごと」に関しては現代語になおすと、「ヨウダ、ソウダ、ラシイ」に当てはまるものも多い。現代語の「ヨウニ」に関して前田（2006:11）は類似事態を表す「ように」について「状態」「比喻」「同等」と呼び大変詳しく分類している。また、現代語の「ソウダ」に関しては漆谷（2010）が接尾辞「げ」と比較して詳しい分類をしている。しかし、前述のとおり球磨方言の「ごと」に関しては日本語の古典語の例の方がより当てはまるため、今回は古典語の分類を参照した。築島（1987:236）は次のように述べる。「「ごと」の語幹のみの用法は、恐らく古い形であろう。（略）この「ごと」は、平安初期以降に発達した訓点の世界では、当時既に古語化して、採用されなかったが、和文の方には「ごと」も「ごとし」も残存した。（略）平安中期以後、「やうなり」の発達に伴って、和文では「ごとし」は衰退した（略）」と述べる。さらに、築島（1987:233）によると「「ごとし」は一般に比況の助動詞とされている」という。

古典語について「ごと」を調べると万葉集に多くの例が見られる。そのため現在、球磨方言との比較を行っている。それに先だち本稿では、現代における球磨方言の高年層世代の会話記録から発話例を紹介し、今後の展望としたい。

3. 本論

本稿の球磨方言インフォーマントは、L1（1915 生）、L2（1920 生）、L3（1925 生）三姉妹と M（1935 生・男）である。三姉妹と M は人吉・球磨地方で生まれ育ち録音時に至っているが、M は熊本大学在学中、人吉・球磨地方から離れている。

録音に関してはファイル kb.1～4 は前田一洋氏が行い、ファイル kb.5,6 は前田氏と筆者で行った。筆者は 2004 年に前田氏所有の約 378 時間（1979～2004 年まで）の録音資料を聞き、録音が明瞭で行事や料理に関してよくご存じである方を選び、その中で 2004 年時点、ご健在の方をお願いして録音を加えた。録音資料以外でもインフォーマントチェックを行いたかったためである。

録音資料の文字化は筆者が行った。一人の発話を一行とした。（全 12,254 行）

表 1. 発話文字化行数

ファイル数	行数	時間（分）	録音年月日
kb.1	2,676	101,5	1996.2.11
kb.2	2,745	92,8	1998.4.9
kb.3	851	51,0	1999.3.31
kb.4	2,428	87,5	1999.春（日付なし）
kb.5	3,229	146,2	2004.7.30
kb.6	325	22,6	2005.7.29（文字化 1/8）

3.1. “goto” の出現場所

“goto” は名詞、形容詞、動詞に下接した形で出現し、出現数は次のとおりである。

表 2. 名詞＋助詞＋“goto”、形容詞＋“goto”、動詞＋“goto”

ファイル名	名詞	形容詞	動詞
kb.1	6	3	15
kb.2	5	1	5
kb.3	2	1	1
kb.4	2	1	15
kb.5	11	4	17
kb.6	3	1	0

3.2. 名詞＋助詞に続く “goto” について、助詞の違いを検討する

“goto” の前の助詞は 3 種類ある。

名詞＋=N

名詞＋=no

名詞+=ga

表 3. 名詞+助詞+“goto”：助詞の種類と数

ファイル名	=N	=no	=ga
kb.1	2	3	1
kb.2	1	3	1
kb.3	1	1	0
kb.4	1	1	0
kb.5	7	4	0
kb.6	0	1	1

上記のデータでは、名詞+=no goto としての例が多いが、=N と =no の違いは直前の名詞の音韻によるものが大きいと思われる。=N と =no の前の名詞について、-N で終わる名詞に続く助詞は必ず =no になる。以下のように同じ名詞であっても =N, =no の両方が使えるものもある。前後の音によるものかもしれないが、将来の助詞の分析でそれだけではない理由が見つかるかもしれないため、=N, =no は本稿では異なる助詞として扱う。

・名詞「mukasi (昔)」に=N がつく場合。

(2) kb.1<u n="0322" sp="L2">

hai itidago mukasi=N itidago-des-u=tai=naa</u>

「はい。イチダゴ (団子の種類)。昔のイチダゴですよー」

・名詞「mukasi (昔)」に=no がつく場合。

(3) kb.5<u n="3198" sp="L2">

soQ=de siawase-des-i-ta=jo=na mukasi=no moN=na</u>

「それで、しあわせでしたよね。昔の人は」

3.2.1. 名詞+=N goto

録音資料中で名詞+=N goto は次のものがある。(同一ファイル中の同一語彙を省く)

kb.1

otoko (男)、bunsjo (文章)

kb.2

kago (籠)

kb.3

tada (ただ：無料)

kb.4

take (竹)

kb.5

ima (今)、 jama (山)、

kb.6 なし

村上 (1998: 90) は「ごとし」の項目において、「たとえ」を意味する場合、「平安時代の用例は、ほとんど「たとえ」で、「例示」や「同内容」の例は多くない」と言及した上で、次のような例も挙げている。

(例) 在原業平〈ノ歌〉は、その心あまりて (ソノ心ノ思イハ余ルホドデアルガ) ことばたらず、しほめる花の色なくて、にほひ残れるがごとし。(古今集序)

さらに、村上 (1998: 90) は「たとえ」について、「形容詞と同じように、語幹「ごと」が独立して用いられることがある。」という例を挙げながら「あるものが何かに似ていることを意味するが、「わがごと」は「私ニ似テ」と訳してよい」と述べている。

(例) 秋の夜の明るくも知らず鳴く虫は、わがごと物や悲しかるらむ (古今集)

以上から次の球磨方言の発話例は「たとえ」を表すといえる。

(4) kb.1<u n="1996" sp="L1">

jaQpa otoko=N goto kjaa-te-des-u=na</u>

「(“しゅんなめじょ”という祭りに使う人形を) やっぱり男のように (顔や洋服などを) 書いてですね。」

「しゅんなめじょ」は農家の小正月行事である。種粃俵に人の形をした人形や粟穂、棒の先端に丸めた紅白の餅などを刺して、今年に加勢がたくさん来ることや豊作を願う。正月についた餅を翌日しゅんなめじょに使い玄関などに飾る。数日後にそれぞれの家の荒神に供え、その数日後に食べる。sjuN (春) -name (男女) -zjo (敬称)

次に「例示」についてのべる。村上 (1998: 91) は「連用形の「ごとき」が多く用いられる」と言及し次の例を挙げている。

(例) 和歌・管弦・往生要集ごときの…… (方丈記)
楊貴妃のごときは…… (大鏡)

球磨方言の実際の発話例より「例示」と考えられるものは次の(2)(3)がある。

(5) kb.5 <u n="1133" sp="L2">

haai mo jaQpa niwa=made ki-mos-i-ta

aN ima=N **goto** teiboo=wa nas-i </u>

「はい。もう、やっぱり、庭まで来ました。あの、今のような堤防はなく、」

洪水の話をしている。川の近くに住んでいて被害がひどかったという内容である。

3.2.2. 名詞+=no goto

(6) kb.6 <u n="029" sp="L2">

koQti ki-naa doo o-kjaku-saN=no **goto** si-to:Q=tee </u>

「こっち、来なさい。なによ、お客さんのようにしていてー」

内容：L2 宅にて。(この日までに数回お目にかかっている)筆者に対しての発話である。部屋の入口で挨拶していた筆者を食卓へと誘っている。

録音資料 kb.1~6 の中で=no **goto** の前にくる名詞の種類は次のものがある。

kb.1

aOsi-domo (私たち)、kwaNziN-doN (乞食どん)、saNkaku (三角)

kb.2

tetu (鉄)、kago (籠)、minomusi (みのむし)

kb.3

cjoomeN (帳面)

kb.4

kwaNziN-doN (乞食どん)

kb.5

kwaNziN-doN (乞食どん)、jama (山)、zi (字)

kb.6

o-kjaku-saN (お客さん)、aOsi-doN (私たち：謙遜)

3.2.3. 名詞+=ga goto

goto とともに助詞=ga が現れたのは、3例であったので、以下に発話を載せる。

aQsi-doN (私たち) が2例、oQ (私) が1例である。「同内容」について、村上(1998:91)は

「たとえ」でもなく「例示」でもなく、「……ノトオリダ」という意味である」と述べ、次の例を挙げている。

(例) 六日、昨日のごとし。(土佐日記)

(例) 「思いのごとくも (私ノ思ッタトオリニモ) のたまふかな。」(竹取物語)

以上のように、「ノトオリダ」、「ニ似テイル」(本稿2.で言及) という意味が「同内容」と捉えると、以下の球磨方言(球磨弁)の発話例も「同内容」として分類できる。

(7) kb.1<u n="0060" sp="L2">

so-baOteN aQsi-doN=ga **goto**

gja kumabeN=ba tuk-au moN=na takusja=wa

oN-na-mos-aN-moN=na tosijoQ=de nak-ar-aN=ba</u>

「そうだけれど、私たちみたい(ト同様)に、

こんな球磨弁を話せる者は たくさんは

いらっしやいせんからね。年寄りでなければ。」

(Mが L1, L2 に「綺麗な球磨弁を使うのですね」と感心しているところ。)

同内容を表すものとして、以下 kb.6 にも似たような発話がある。

(8) kb.6<u n="141" sp="L2">

moo jaQpa asi-doN=ga **goto**

tuka-i-naQ-ta tosijori=wa oN-nahaN-mos-aN=do=na

aNmari=ja takusjaa=wa oNna-haN-mos-aN=doN=do </u>

「もう、やっぱり、私どものように(ト同様)

(球磨弁を上手に) 話せる年寄りは いらっしやいせんよね。

あんまりは たくさんは いらっしやいせんわよ」

次の発話は「例示」(タトエバ……ノヨウナ)を表す。

(9) kb.2<u n="1160" sp="L1">

juuka ojazi moQ-t:oQ-to=to ataNma-zjaQ-des-u=te

oQ=ga **goto** ogjaaN si-t:oQ=te juuka

ojazi=no aQ-toko=ga neuti=no aQ-to-zja=de </u>

発話文中の「:」は融合として用いている。(例: -to i-u → -ti:o-u、-tju:-u へと言う)

「良いお父さん。(お父さんを) 持っているのが当たり前ですって。」

私の（お父さんの）ように あんな（焼酎ばかり飲んで）して（ても） 良い。
お父さんが いる（という）ことが 値打ちがあるのよね。」
（L1が「焼酎ばかり飲んで、怒ることが多かった父親だったとしても）父がいてくれたことに感謝している。」とMに話している）

3.3. 形容詞：“goto”形容詞に下接する例

以下の(7)は上記、村上(1998:90)の「同内容」に当てはまる。ここでは、L2が同居の嫁を褒めている。(7)の発話の直前に、Mに以下のように話している。

(10) <u n="0641" sp="L2">

moo naN-deN si-mos-u=bai jome=ga </u>
「もう、何でもしますの。嫁が」

(11) kb.1<u n="0643" sp="L2">

si-i-kir-aN moN=na nak-a **goto**</u>
「(嫁)ができないもの(料理)はない(という)(ト同様デアル) くらい」

(8)の直前の発話は以下である。筆者にL1、L2、Mがかつての地域の話をしている。知り合いがみんな死んでしまい、昔あったはずのお寺も橋がかかってからどこにいったかわからないという内容である。

(12) <u n="1123" sp="G1">

ima-goo miNna uQ-tiN=de sim-oo-te </u>
「今ごろ (は)、みんな死んでしまつて」

<u n="1124" sp="B1">

ara ee a juuhukuzi=mo aN hasi=ga kakaQ-te=kara aN </u>
「あれは、ええ、あ、ユウフク寺も、あの橋がかかってから、あの」

<u n="1125" sp="G1">

wak-aN-mos-aN </u>
「わかりません」

以下(8)(9)は「同内容(ト同様デアル、ノトオリデアル)」に当てはまると考えられる。

(13) kb.5<u n="1126" sp="M">

wakar-aN goto naQ-ta =moN=ne</u>
「わからなくなった(ト同等デアル) からね」

<u n="1127" sp="L2">
wak-aN-mos-aN=naa</u>
「わかりませんねえ」

以下は (9) の直前の会話である。L1、L2、L3、M はこの時点でも地名などを藩時代そのまま使っていた。そのため、自分達の地域は相良（藩）と言っている。L1、L2 姉妹は子供時代、およそ 1925 年以降に人吉・球磨地方で野菜売りをしており、全ての祭りに参加していたため、かつての地名や住人、町や村の様子、季節ごとの料理や祭りで出す料理に非常に詳しくかった。また M は 1940 年ごろから人吉周辺で土器を探し地域の言葉や歴史に興味を持つ少年であった。その当時、地元の郷土史家宅にたびたび行って話を聞いていたという。そのため、録音時にいたるまでの方言、文化や地域の様子に大変詳しい。

(14) <u n="1798" sp="M">

koko-heN=no maki=wa aN=no iQ-to:oQ-to-des-u=ka </u>
「ここ（人吉・球磨地方）辺りの^{ちまき}粽は餡子が入っているのですか」

<u n="1799" sp="L2">

hai </u>

「はい」

<u n="1800" sp="L1">

aN=no iQ-to:N=moN </u>

「餡子が入ってるよ」

<u n="1801" sp="L2">

go-gatu=no seQku=nja: </u>

「五月の節句には」（：は=ni +=jano の融合である）

<u n="1802" sp="M">

ee </u>

「ええ」

<u n="1803" sp="L1">

ki-nah-aN-mos-i=jo </u>

「(遊びに) いらっしやいませね」

(15) kb.1<u n="1823" sp="M">

soQkoso kudo=ni kube-te jok-a goto </u>

「それこそ、窯にくべていい（ノトオリデアル）ように」

上記 (9) では季節の食べ物の話をしている。五月の節句のときに粽を食べるかどうか、とい

う話で、このあと近所の人が（粽の話からつなげて）「アクマキは薩摩（鹿児島）かどこかでするんですよね？」という質問に対し、Mは<u n="1811" sp="M">satima=N-to des-u=moN </u>「薩摩の（習慣）ですよ」と返している。

全資料において、“goto”が形容詞に続く例をあげる。形容詞は次のものがある。なお、同一ファイルの同一語彙は省いている。

kb.1

nak-a（ない）、karuk-a（軽い）、jo-a（いい）

kb.2

otosik-a（恐い）

kb.3

uuk-a（多い）

kb.4

nus-aN（つらい）

kb.5

nak-a（ない）、otosik-a（恐い）、maQ-kurok-a（真っ黒い）

kb.6

kinodoQ-ka（気の毒）

3.4. 動詞“goto”、あるいは、動詞+接辞“goto”の例

3.4.1. 動詞にそのまま続く場合：動詞“goto”

以下 (10) の発話の前に内容を説明すると、L1、L2 姉妹の実家にある兜や棒（rokusaburoo≒槍？）、巻物について M に語っているところである。この姉妹が「巻物が読めないので内容を教えてもらえないか」と M に頼んでいるところである。L1 が「ロクサブロウもある。…棒術とかなんとか言って、子供時代に皆で遊んでいました。」と話しているため、家にある鎌倉時代の道具の話と思われる。後に M に伺ったところ、「ロクサブロウとは、六尺棒のことではないか？」と教えて下さった。以下は同内容（ノトオリデアル）を表す。

(16) kb.1<u n="1421" sp="L1">

makimoN=no-goz-aN-mos-i=doN makimoN=t:ju-i=ka ara moo

zjuei zjuei=te kja-te ar-u goto=de-goz-a-si-ta </u>

「巻物がございましたけれど、巻物というか、あれは、もう、

^{じゅえい}寿永（1182-1183年）、寿永って書いてあるようでございました。」

（発話文中の「:」は融合である。例：-to i-u → -ti:o-u、-tju:-u ～と言う）

以下 (11) の内容は L2 が M に昔の葱の作り方について話しているところである。直前の会話

を以下に挙げる。L2によれば、昔は葱を植えるときに、白いところ（白い根）が多くできるように土を盛っていた、という話をしている。これを「ふか葱」というようである。この地域は生姜も根がたくさんできるような方法で植えていた。1930年当時の思い出話にも sjougane（生姜の根）という語彙がでてくる。(11) 前後の会話を以下に挙げる。

(17) <u n="2022" sp="L2">

doro=no jokaQ-ta-des-jo=ka=na ima=wa doro=wa
aNma ag-e-mos-aN=moN=na </u>

「(昔の葱の作り方は) 泥が良かったのでしょうかね。今は、泥はあんまり（上の方まで）あげませんよね。」

<u n="2023" sp="M">

haa </u>

「はあ。」(感心している)

<u n="2024" sp="L2">

mukas:ja ipaQtja age-mos-i-ta=to=bai </u>

「昔は、いっぱい（泥を葱の上の方まで）あげましたのよ。」

<u n="2025" sp="M">

hee </u>

「へえ。」(感心している)

<u n="2026" sp="L2">

ano tukene=made </u>

「あの（葱の）つけねまで」

(略：感嘆の返事など) + (18)

<u n="2030" sp="L2">

sosu=to sirane=no gjaN nag-oo-goz-aN-su=to=tai </u>

「そうすると、(葱の) 白い根が、こんなに長くございますのよ。」

以上の内容をふまえて (18) を分類したところ、「たとえ、例示、同内容」いづれにも当てはまらない。そこで、筆者はこの分類を「目的 (……ノタメニ)」という新たな用法を加えることにした。

目的 (……ノヨウニ)

(18) kb.5<u n="2027" sp="M">

hukanegi=no dekuQ goto</u>

「ふか葱ができるように」(ふか葱を作るために)

次の(12)について説明する。(12)の前は以下のような会話である。L1, L2 は自分たちの球磨方言(球磨弁)を誇りに思っている。Mが「もう球磨弁はほとんど残っていない」と嘆いていた直後の会話である。

(19) <u n="2527" sp="L2">

so-baQteN omahaN so eroo nokoQ-t:oQ-to=ga

omai=to ori </u>

「それでもね、(Mに) あなた、そう、たくさん(球磨弁)が残っているのが、
(姉 L1 に) あなたと私。」

<u n="2528" sp="L1">

aa</u> 「そう」

<u n="2529" sp="L2">

so-gja oN-nar-eN=de=naa </u>

「そんなに(球磨弁を話せる人は)いらっしやらないわね。
(=de は発話者の強い思いを表す終助詞)

<u n="2530" sp="L1">

zjaQ=do </u> 「そうよ。」 (=do は確信や自信を表す終助詞)

<u n="2531" sp="L2">

na </u> 「ね。」

<u n="2532" sp="L1">

moo </u> 「もう(それは)、」

<u n="2533" sp="M">

des-u=jo oN-nar-eN-des-u haa </u>

「ですよ。いらっしやいません。はい。」

<u n="2534" sp="L2">

hai </u> 「はい。」

<u n="2535" sp="L1">

kumabeN=ba manes-i-nar-u-baQteN jaQpa nakanaka-des-u=no </u>

「(他の人が)球磨弁を真似たさるけど、やっぱりなかなか(上手くない)ですよ。」

<u n="2536" sp="M">

mane s-i-te dekuQ-moN=zj:a nak-a-des-u </u>

「真似してできるものではないです。」

<u n="2537" sp="L1">

dek-i-mos-aN=moN=na </u> 「できませんよね。」

<u n="2538" sp="M">

hai manes-i-te dekuQ-moN=zj:a nak-a-des-u=de </u>

「真似してできるものではないですよ。」 (=de は発話者の強い思いを表す終助詞)

<u n="2539" sp="L1">

uN </u> 「うん。」

この土地の高年層話者の多くは自分達の球磨方言を大変誇りに思っている。人吉・球磨地方は地域によって語彙や文法構造に差があるため、高年層話者は少しの違いで相手の出身を知ることができるのである。M は人吉・球磨地方の各地に知り合いがいるため、そこで出会った人々について話している。(12) の goto は「こんな風に」という共通語訳にした。次の (12) は例示(タトエバ……ノヨウナ) を表している。

(12) kb.2 <u n="2561" sp="M">hosuto hoo koQti=z:ja hoo

botamoti=wo=ba ku-ta=t:ju:u goto wo=ba des-joo=ga </u>

「そうすると、ほら、こっちじゃ、ほら、

「botamoti=wo=ba」(ぼたもちを) 食べたと言うような 「=wo=ba」 でしょうが」

内容: =wo=ba は格助詞=wo と副助詞=ba である。前述のとおり、ここでは L1, L2 姉妹が M に、L2 「自分たちのような(純粋な)球磨弁(球磨方言)は真似できないでしょうよ」、L1 「真似する人はいるんだけど、なかなか(上手くないわよね)」、と話すと、M は「そうですよ。(あなた方のような純粋な球磨弁を話す人は) いらっしゃらないですよ」と答えている会話である。その流れで、同じ球磨弁でも、地域によって違うから出身がすぐ分かるという話をしている。上記の発話(12)の直前で、(13)のようにMが近くの村の言葉を伝えていることからわかる。なお、以下(13) は会話例として挙げているだけである。

(13) kb.2 <u n="2559" sp="M"> ee ora botamoti=wo=ba mor-oo-ta-re=doN

naNtoka =jo=ba t:i-jaQ-des-u-moN=ne </u>

「ええ、 「ora botamoti=wo=ba mor-oo-ta-re=doN」 (私はぼた餅をもらったけれども)、なんとか 「=jo=ba」 (よば) って言いますもんね。

<u n="2560" sp="L2"> ee </u> 「ええー！」 (驚いている)

内容: (13)ではMが近所の村で使われている助詞について L1, L2 に話している。M は(自分達は) 助詞 =wo=ba を使っているけれど、「あの村で(使う助詞) は、なんとか =jo=ba と言うんですよ、」という内容である。それを聞いて L1, L2 は驚いている。この後、そういえば、近くの村でも (=wo=ba でなくて) =jo=ba と言いますね、という話になる。

3.4.2. 動詞 + 接辞 "goto"

3.4.2.1. 否定を表す接辞 -N : 動詞+ -N goto

動詞+ -N goto は多い。特に、注意、警告、教訓などの発話に見られる。以下(14)の内容は、L1, L2 がMに料理の話をしている。上記のMの発話は、直前の L2 の発話（以下）を受けたものである。uQ- は動詞の接頭辞である。

<u n="2251" sp="L2"> nisime suQ-tok:jaa imo=wa ano jude-te hos-i-mos-u=to
sos-i-mos-u=to Qtara uQ-kw-ar-e-mos-aN </u>

「煮しめ（を）するときには、芋は、あの、茹でて干しますの。

そうしますと、そしたら、崩れません。」

なお、上記の「:」は融合をあらわし、suQ-tok:ja=a は sur-u toki=ja となり、「するときは」と訳せる。筆者は(11)において、「目的（……ノヨウニ）」という新しい分類を提示した。次の(14)も「目的」を表す発話例である。

(14) kb.1 <u n="2252" sp="M"> hai hoo sooka uQ-kwa-e-N **goto** </u>
「はい。ほお、そうか、崩れないように。」

その他の動詞+ -N の例は以下である。

kb.1

iw-aN (言わない)

kb.2 なし

kb.3 なし

kb.4

koe-N ([水が堤防を]超えない)、iQ-kakar-aN (かからない:iQ- は接頭辞)

naN-da-nar-aN (どうしようもない、どうにもならない)、magar-aN (曲がらない)、

se-N (しない)、kak-eN (書けない)

kb.5

tuk-aN (付かない)、wakar-aN (わからない)、midar-e-t:or-aN (乱れていない)

amae-N (甘えない)、wasur-eN (忘れない)、age-t:ja-naN (あげてはいけない)

igok-as-eN (動かせない)、mi-seN (見せない)、mi-eN (見えない)

kb.6 なし

[2] 発話者の強い意思を表す接辞 -baN : 動詞+ -baN goto

以下は「例示」(タトエバ……ノヨウナ)を表す。

(15) kb.4 <u n="2413" sp="L2"> tanom-aN-baN **goto** naQ=de wa=ja naa </u>
「頼まなければ (いけない状況) というようになるわ。あなたは、ねえ」

上記の内容は、L1 (1915 生), L2 (1920 生), L3 (1925 生) 三姉妹が M (1935 生、男性) と話しているところである。長姉 L1、次姉 L2 は夫を亡くし、誰かがいてくれることのありがたさを末妹である L3 に話している。L3 に対して、「何かあったときには (身近にいる夫や姉妹に) 頼まなければならないのだから、日ごろから感謝を口にしなさい」と説いているところである。

[3] 他者の行動を表す接辞 -jar : 動詞 + -jar goto

以下の(16)は同内容 (ノトオリデアル) を表す。

(16) kb.4 <u n="2206" sp="L2"> soQ=de koN-mae=no i-i-jaQ **goto**=tai
naN=ja-ka=ja tuQ-kok-e-t:or-e=ba hajo hir-a-u=tai </u>

「それで、この人 (L3 妹) が言うのがよ (言っているのト同様デアル)、

なんだかんだ (腰や背中) が曲がってれば、(落ちてるものを) 早く拾うよ (ですって。)

上記の内容としては、L1, L2, L3 姉妹と M が話しているところである。長姉 L1 と次姉 L2 は背中と腰が曲がっている。L2 が「こんなに背中や腰が曲がってどうしようもない」と末妹である L3 に話したところ、「腰や背中が曲がっていれば (人よりも地面に近いので) 落ちているお金などを (人より) 早く拾えていいでしょうよ」と言った、という話を M にしているところである。末妹の発話に姉たちは「そんなわけないでしょ」と否定したが、末妹 L3 は再び「本当のところ、(腰が曲がったら、物を拾うのが) 早いでしょ?」と真剣に聞いたと言う話である。この発話のあと、次姉 L2 は「こんなに曲がったら物を拾うのだって大変なのよ!」、長姉 L1 「そうよ!」と言っている。

4. おわりに

本稿では球磨方言の「ごと」がどのような発話にあらわれるか、またその働きについて、実際の会話から発話例を抜き出した。様々な辞書も参考にしたが、辞書の用例は全て上代から平安時代までの書き言葉の例でしかなかった。そのため本稿の「ごと」分類では、村上 (1998: 90) による「たとえ、例示、同内容」に当てはまるかを検証するにとどめた。しかしそれだけでは分類できない例があり、新しく「目的(……ノヨウニ)」という用法を提示することができた。今後はこれらの働きについて、より詳しく検討したい。

参考文献

上田萬年 (編) 『大日本國語辞典』(1968 [1914]) 東京: 富山房。

漆谷広樹 『接尾辞「げ」と助動詞「そうだ」の通じて気研究』(2010) 東京: ひつじ書房。

- 小野綾子 (2018) 「熊本県球磨方言の”goto”の用法」『東京大学言語学論集』40:179-192.
- 尾上圭介 (2016 [2001]) 『文法と意味 I』東京:朝倉書店.
- 北原保雄 (1981) 『日本語助動詞の研究』東京:大修館書店.
- 金田一春彦 (1994) (編) 『学研 現代新国語辞典』東京:学習研究社.
- (1979 [1978]) (編) 『学習国語大辞典』東京:学習研究社.
- 工藤浩、仁田義夫、森山卓郎 (2000) 『日本語の文法3 モダリティ』東京:岩波書店.
- 此島正年 『助動詞・助詞概説』(1983) 東京:桜楓社.
- 斎藤純男、田口善久、西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』(2015) 東京:三省堂.
- 坂詰力治 (2011) 『中世日本語論功』東京:笠間書院.
- 田中章夫 (2001) 『近代日本語の文法と表現』東京:明治書院.
- 築島裕 (1987) 『国語学叢書3 平安時代の国語』東京:東京堂出版.
- 寺村秀夫 (1988 [1984]) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』東京:くろしお出版.
- 時枝誠記 (1961 [1954]) 『日本文法 文語篇』東京:岩波書店.
- 中西字一 (1996) 『古代語文法論』東京:和泉書院.
- 仁田義夫、益岡隆志 (編) (2001 [1989]) 『日本語のモダリティ』東京:くろしお出版.
- 日本語文法学会 (編) 『日本語文法辞典』(2014) 東京:大修館書店.
- 松村明 (編) 『大辞林』(1989 [1988]) 東京:三省堂.
- 前田直子 『「ように」の意味・用法』(2006) 東京:笠間書院.
- 村上本二郎 『文法中心 古典文解釈の公式』(1998 [1966]) 東京:学習研究社.
- 柳田征司 (1985) 『国語学叢書5 室町時代の国語』東京:東京堂出版.
- 山崎馨 (1992) 『形容詞助動詞の研究』東京:和泉書院.
- 山田小枝 『モダリティ』(1990) 東京:同学社.
- 山田孝雄 (1950) 『日本文法学要論』東京:角川書店.
- 吉田金彦 (2010a) 『吉田金彦 著作選6 上代語の助動詞 下』東京:明治書院.
- (2010b) 『吉田金彦 著作選7 現代語の助動詞』東京:明治書院.
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』東京:塙書房.
- (2001 [1974]) 『国語文法論』東京:笠間書院.
- (2013 [1996]) 『日本語概説』東京:岩波書店.

本稿においては言語学研究室の西村義樹先生に御助言を賜りました。また Tulip 検討会において言語学研究室の皆様にご多くの助言を頂き訂正し本稿に反映しております。ありがとうございました。インフォーマントの方々、ネイティブチェックをして下さった前田一洋氏・康江氏ご夫妻にこの場をおかりして御礼申し上げます。なお、本稿で言及した「熊本県球磨方言にみられる特徴的な複語尾」(2017)については東京言語研究所にて優秀賞を受賞したが現在未公開のため、近く公開予定である。

Usage of “goto” in Kuma Dialect in Kumamoto Prefecture

Ayako Ono

Keywords: Kuma dialect, goto, usage

Abstract

This paper describes the use and meaning of “goto” in Kuma dialect of Kumamoto Prefecture. “Goto” appears after nouns, adjectives and verbs. When “goto” appears after a noun, three kinds of particles, =no, =N, and =ga, come between the noun and “goto”. This combination is used as a figure of speech or an illustration/demonstration of the speaker’s idea. “Goto” attached to adjectives serves to provide an explanation or to present a supposition. Verbs that come before “goto” are in the negative or volitional form.

(おの・あやこ 東京大学人文社会系研究員)